



普勸坐禅儀／道元筆／紙本墨書／縦 28.6×横 318.5 cm／鎌倉時代 天福元（1233）年

嘉禄3年(1227)、宋から帰国した道元禅師は、万人に坐禅を勧めたいとの念願から、坐禅の作法やその意義を『普勸坐禅儀』に著した。帰国後最初の著述である。この時著された『普勸坐禅儀』は嘉禄本と称されるが、そのテキストは現存しない。

現在、永平寺に伝わる本書は、天福元年（1233）中元日（7月15日）に、道元禅師が京都の深草にあった観音導利院（興聖寺）で自ら記したもので、天福本と称される。以後、『普勸坐禅儀』は道元禅師により修訂が行われ、現在一般に流布している『普勸坐禅儀』が成立した。これは流布本と称される。この流布本のテキストは伝わっているものの、道元禅師自筆によるものは現存しない。

したがって、本書は修訂された流布本からいえば、経過的段階にあるといえるが、道元禅師自筆の完成された一書として貴重である。なおかつ、坐禅を宗是とする曹洞宗にとって、開祖たる道元禅師が坐禅について自ら筆を執った原本であることも本書のかけがえのない価値となっている。

本書の本文の文字数は八百八十一字で、七十四行にわたって坐禅儀則が四六駢儷体の対句を用いて記される。料紙は中国で作られた蠟箋料紙であり、松・菊・蘭など、中国人が好んだ四君子の花模様に加えて牧馬図・前卓図が銀泥で彩られる。

本書は永らく永平寺に襲蔵されてきたものではなく、道元禅師六百回大遠忌に相当する嘉永五年(一八五二)七月、京都在住の古筆鑑定家古筆了伴によって永平寺に献納された。